



ブロンズ・アイドル役のメイクアップを施されるジョナサン・ハンクス Photo: Estonian National Ballet

ブロンズ・アイドルこぼれ話

ゴールデン・アイドル、もしくはブロンズ・アイドルとは、マリウス・プティパ振付の『ラ・バヤデール』に登場する仏像のこと。この役にまつわる秘話のいくつかを、マイク・ディクソンが紹介します。

ロイヤル・バレエが先ごろ上演したナタリア・マカロワ版は人気の高い演出だが、ここではブロンズ・アイドルは、最終幕の寺院の場面の冒頭で超絶技巧のソロを披露する。一方ロシアでは登場場面はもっと早く、ガムザッティとソロルの結婚式中の一曲として扱われている。だがこの役について特筆すべきは、これがプティパの発案によるものではないということだろう。プティパが『ラ・バヤデール』を初演したのは1877年。そして最後の改定を行ったのはマリンスキー劇場の首席バレエ・マスターの退任を強いられる直前の1900年だったが、この時点ではまだブロンズ・アイドルは登場しない。その後1917年にロシア革命が起こるとバレエの上演は次々と停止された。壊滅的な打撃を被るかに見えたが、教育人民委員(文部科学大臣にあたる)アナトール・ルナチャルスキーがバレエ愛好家であり、バレエはロシアの民衆(当時は識字率がきわめて低かった)に革命政府のプロパガンダを広めるのに有効な芸術であるとレーニンを説得。その甲斐あって、バレエは命脈を保つことができた。

だがレパートリーに残っていたプティパの作品は、すべて改定されてゆく。わけても、彼の元で舞台監督を務めていたニコライ・セルゲイェフが1918年、亡命時に携行した21冊のステパノフ式舞踊譜に記されていた詳細な内容(初演版に遡るもので

あった)は、ロシア国内では失われてしまうことになった。イギリスでは1930年代に、ニネット・ド・ヴァロワ率いるヴィック＝ウェルズ・バレエが、サドラーズ・ウェルズ劇場でロシア古典名作を次々と上演したが、その際に貴重な情報源となったのが、他ならぬこのセルゲイェフの舞踊譜だったのである。

ロシアでは、早くも1917年にアレクサンドル・ゴールスキーがボリショイ・バレエで『ラ・バヤデール』に手を入れていた。1930年代にはアグリッピーナ・ワガノワがマリンスキー・バレエ(後のキーロフ・バレエで、当時はGATOPと呼ばれた)でさらなる改定を施し、1940年代にはヴァフタング・チャブキアーニが、現在ではすっかり定着した男性の技巧的な要素(ダブル・アッサンブレでのマネージュが特に有名)を導入。ブロンズ・アイドルが初めて舞台上に登場したのはこの時で、振り付けたのはニコライ・ズブコフスキーだった。

この役の出番は短い、ダンサーはメカニカルな外見(踊りだしの部分には、ややぎこちない動きが含まれる)と、高度な跳躍や回転を盛り込んだ、流れるようなアンシェヌマンを融合させなくてはならない。難しいソロだけに、人を得れば目にも彩なるショー・ストップとなる。

そして独特なのは、ダンサーが全身を青銅または金に塗るところだ。そのプロセスは、国やバレエ団、演出により千差万別である。筆者がその一端を知る機会を得たのは、先ごろエストニア国立バレエを訪問した際だった。同団の衣裳かつら部門の責任者のタイム・ルメが、なめらかな光沢が全身を包むまでの逐一を見学させてくれたのである。タイムは大きな紙をスタジオの床に敷き、その日踊るダンサーをその上に立たせて、助手のマーヤ・トゥーリングとともにおよそ40分かけて塗ってゆく。タイムが最高の仕上がりを求め、自らの肌の上で試行錯誤を繰り返した末に完成したのが、次の手順である。まず下地になる層を塗り、さらに3層に分けて水ベースの舞台用化粧品であるエアストリーム・メイクアップのゴールドを、少しずつスプレーしてゆく。「アンティーク・ゴールドだけだと色が暗すぎたのですが、一番上をゴールドに変えたところ、今のような完璧な黄色味が出せました。」

同団の団員でこの役を踊ったジョナサン・ハンクスによれば、全身メイクの完成後に身体が冷えないようにするのがたいへんだとか。「開演前にはメイクは終えていますが、出番まで30分も待たされるます。何か着ると剥げてしまうので、塗ってもらう前に充分ウォームアップしておくように気をつけています。」同僚のブルーノ・マッキアルディも、彼に同意する。「身体が温まった状態を保つのは大切ですね。僕も、舞台袖が寒くても座るわけにもいかず困ったことがありました。お尻に二つ、丸く剥けた跡ができちゃうからね。」そして二人は、メイクを落とすのがいちばん厄介な作業だと口を揃える。ハンクス曰く、「シャワージェルがボトル半分は必要ですね。気がついたら、シャワールームの床が金びかになってるし。」(訳:長野由紀)